

TS主人公がロリコン仮
面と出会ったら～

バウよりカッコいいMSはいない

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある作品群の中で、どの世界にも現れる仮面の男たち。その全ての祖先とされる、赤を好む仮面の男を知っているだろうか。

時に最強の敵として、時に頼れる味方として、そして時にネタキャラとして登場する彼の名はシヤア。

……というのは置いておいて、この物語は、TSプラス転生しちやったロリ主人公が、かの有名なロリコンに出会った話であります。赤い彗星好きの人は見ないでネ？ね？

(フリ) ○注意！○必須タグには保険も含まれます。それから、ORIGIN要素を含みます！

目次

49

プロローグ

赤き単眼の魔物（3倍の速度で動く口

リコン）—— 1

〈序章〉 主人公と神と、—— 5

第一章 TS少女と無色の蒼

第一話 宇宙世紀と少女 —— 15

第二話 揺れる世界と幸せな家族

28

第三話 零れおちる熱、そして、覚醒

35

第四話 閑話のような閑話 —— 44

第五話 始まりへと続く日常

プロローグ

赤き単眼の魔物（3倍の速度で動くロリコン）

『……こち……ア……さ』

……返……願……』

私はただ、全て無音と漆黒に閉ざされた世界に放り出されていた。

その世界とは、重力という錘を抜けた先にある、ただただ広がる可能性の世界——宇宙。

何も聞こえず何も見えない、その暗闇の宇宙の中を鉄の^{ひとがた}人形に乗ってひたすら漂う。そうしていつか、このままこの暗闇に溶けていくのだろう。

『き……しろ……っ！』

……む……は！』

鉄の腹の中ではないかも、こちらに呼び掛けているだろう『彼』の声と、酸素残量……つまり私の余命を告げるアラートが休むことなく続ける。

声すら出せないのに、クスリと口元を歪めたのはきつと、『彼』の必死さと私の短命さ、そのどちらにも向けたものだった。

『聞こえてるのなら返事をするんだ！』

アズハ！』

すぐそばにきていたその声が一際大きく聞こえて、漆黒の中でも一等の輝きと赤の光沢をもった、『彼』の人形が私にも見える。

人形——MSはその不自由な漆黒の海の中を、今もなおこちらにむけて光を焚いている。

あんなにも遠くに離れていたはずなのに、そんな中で私を見つけられたのはその能力故のものなのか……それとも？

……まあなんにせよ、こうして『物語』は私という異物を受け入れたようだ。

決して交わることの無かった世界が目の前にあって、決して触れることの無かった彼

らと出会って、きつと奇跡の上になりたつたこの瞬間に、静かに目元を雫が伝う。そして無重力の翼を受けて弾けた涙が、冷たいコックピットを漂い私に寄り添う。

そんな今この瞬間でしか見ることの出来ない美しさに目を奪われ、とうとう画面のむこう、目の前にある人形にむけて手のひらを向ける。

『フー・フーにいたのか』

少し揺れる、母艦まで我慢するんだ』

鉄の壁を介してなお、感じてしまったその暖かさは、間違いなく彼のものである。心配が直接心に伝わってくるのだから、それは疑う余地のない優しさで。

どうやら私は寂しかったようだ。心の中でじわりじわりと広がっていくそれは、きつと安心と呼べるもの。

それはきつとこの世界で初めて感じたものだ。

涙を流しながら、それでもたつた今崩壊した哀の物語をふつと回想し、手を伸ばす赤き単眼の魔物を視界におさめ、私はこう考えた。

ああ――

（ロリ体型でよかった……）

——そうこれはつつ！

元男で現ロリのツンデレ？主人公と、金髪ロリコン仮面男が織り成す、宇宙世紀百年にわたる源氏物語……ではなく、ただただ生き延びることを目標とした、不運な彼女の歴史である。

『弱っているアズハ……いいものだな』

「○ね」

く序章く 主人公と神と、

神様と出会った。

たとえば街中でそんなことを口にしたら？

きつとそこにいるほとんど人間が、皆平等にこう思うだろう。

『こいつは狂っている』と。

まあたしかにその通りかもしれないし、自分でもどう考えたって、この発言は普通じゃあない。

まだ咳一つしないで、嫌いな教師から余命宣告を受けたほうが信じるだろう。……強引な例えだっただろうか？

突拍子の無い話にホラは付き物だ。だから疑いたくなるのも分かる。

それでもこれは真実である。

そして、不本意ながら真実となった空想と幻の存在は、出会ったその時俺にこう告げた。

「bad end ただ、おめでとう」と。

拍手する音に動揺はした。にやけた顔に怒りがこみ上げた。感情に任せて泣きたくもなった。

なのに、それが「落ち着け」と言っただけで全ての感情という感情が、一瞬でどうでもよくなった時、初めてこれは人では無いなとも思った。

そしてそこから神それが語ったのは、事の顛末とこれからのプランである。何ら私情、そして無駄話のない、完結している命令のような説明に、ただただついていくのに必死になった。

その結果まとめるところだ。

一つ、私が君を殺やりました。

二つ、でも完全には殺やつてないよ。

三つ、元には戻せないし、戻さないけど、『つぎのじんせい次』をあげよ。

四つ、切りよく三つだけ特典をあげましょう。

五つ、特に干渉はしないよ。

もつと細かな所も話していたが、必要な所をまとめるとだいたいこの五つだ。

ちなみに一つめの話題では、なんのために俺を……というのは語られなかった。気にはなるが、相手が常識を飛び越えている以上、問いただすのも無駄だろうと感じたので、この話題はスルーするしか無かったのだ。

「ふむふむ、理解はしてくれたかな？」

それともしているフリをしているのかな？

まあ、ドツチデモいいんだけどねーヒヒヒー」

……間違いなく狂っている。

ちなみに名前を聞いたら、「なんで唯一無二の存在に名前がいるの？」なんて言われた。僕以外の下等生物に、わざわざ固有名詞を付けられるのは堪らない、とも。

終始にやけている神は、おもむろに手元からA3の紙を生み出し、それを俺に見せつける。

『○○○○の殺害、及び転生に、ついて』

なにやら物騒なことが書かれているが、どうやら先程の話を大まかにまとめた物のようだ。

「さて、それでは追加説明するよ

まずは、行き先だ」

紙を持ち凝視している俺に楽しそうに笑うと、急かすようにそう話し出す。

「その世界はね……」

鋼鉄の巨人と、それを駆る人々。

そして全てを取り巻く環境と戦争。

ニュータイプと呼ばれる人類の進化。

その物語、つまり——」

『機動戦士ガンダム』

よりもよつてそれか。ニュータイプがいるのなら宇宙世紀……もしくはXとか？

どのみち死亡フラグだのなんだの関係なく、そこらじゅうに死の転がっている世界じゃないか。

「……ああそうそう、僕は思ってたんだよ

君のすむ国はわりと平和だ

でもでも、そこにある平和という器にはきつと、多すぎる程の人間がいるだろう？

なのに溢れることも厭わずにただ注がれる人、そしていつしか溢れていた人々は、カ
バーしきれなかった平和を『つまらない』ものとして感じ始めるのさ

そして君は溢れた側の人間

ほら、刺激のない世界はつまらないと感じていたんだらう？ラッキーじゃないか」特に理由も聞かされず、原因も分からず殺されたのに、何がラッキーなものか。

あんな世界に行つたらすぐ死んでしまう。もしかして、それすらも楽しむ気なのか？
「心配無用」

今のままではたしかに死んでしまうだろうね

だから君に特典という名前の力をあげるのさ」

特典か。たしかにそんなことは言っていた。

でもこいつの事だから期待はしていなかったのだけど……死なない程度のものが貰えるなら助かる。

そしてなるべく平和に過ごせるように。

「君が僕によつて得る力は三つ」

もちろん独断と偏見で選ばせてもらったよ

まずは人類の革新、ニュータイプへの変体だ。おめでとう！

二つ目は宇宙世紀世界での技術への知識。昨今では技術チートとか言うね」

意気揚々と話す神を見ながら思う。なにがおめでとうなんだろう。

ニュータイプへの変化は個人としてはたしかに嬉しい。

でもそれと同時に、作中に登場するニュータイプたちは、ほとんどの場合大きな厄介

事に巻き込まれていたはずだ。

これによって自分の人生は、平穩からかけ離れてしまうかもしれない。手放しでは喜べなかった。

あるかないかで生死すら決まってしまう。それほど大きなステータスなのだ、ニュータイプとは。

そして地味に嬉しいのが知識だ。

当然の事ながら、あの世界は俺の世界よりも格段に技術が進んでいる。

その知識を得られるのは素直に喜ぶべきか。

「思案は終わったかい？ 準備は出来てるかい？

ヒヒ、思えば最近にしては楽しい時間が過ぎたよ

君はたしかに下等生物だ。この僕の領域に入っていたとしてもそれは変わらない事

実だ

……だけだと楽しみに楽しめたよ、とつても悔しいけどさ

もちろん感謝なんかしないけどね」

しないのかよ。

いや、されても困るけどさ。

「ヒヒヒ、時間もあとわずか

最後の特典を伝えるよ

それは……」

話していたトーンを下げたその言葉と、静かにブラックアウトしていく視界。それにはじめて気がついた時、たしかに強い衝撃を感じた。

「どうやら時間がきたようだね

伝えるよ、君の最後の特典は」

一段と濁った笑みを浮かべた狂神は告げる――

「愛されることさ」

……

……はい？

『おい、新人』

岩石同士がぶつかりあう轟音、そして鋼鉄の軋む不快な音。絶えることの無い産み出される騒音は、小難しげな名前を与えられたモビルワーカーから発生している。

先程入った通信を確認し、キヤタピラー付近の作業員たちを見ると、ヘルメットの間挟んだタオルケツトを一心不乱に絞っていた。

そう、真つ昼間のジャブローは、たしかに熱地獄と化していた。

終始動かしていたモビルワーカーの手を止めると、コンソールの方へと目を向ける。

『おい、新人！』

さっさと降りてこい！休憩だ！』

「わかりました」

新人……つまりは『彼』の事だ。

通信相手が返答の声を聞き、さっさと回線を切るのを横目に、コックピットの扉を開く。

無駄な音声が途切れたそこに残るのは、照りつける太陽の容赦のない熱攻撃と、下から聞こえる作業員たちのがや。

バイザーごしに辺りを見回すと、自らが掬い上げた岩石と土砂が砂ほこりを巻き上げ、バイザーの表面を静かに汚していく。

これは一度外して拭いたほうが良さそうだ、そう考えると一度座席に戻りバイザーを外した。

直に見る景色は、バイザーごしに見る景色とさほど変わることはない。

天高く昇る太陽に目を細め、『彼』は笑う。

「こうして見ると、やはり日差しは夕焼けが一番だ」

ここにはないその光景を想像し、つい口元に笑みを浮かべると、彼はもう一度座席を立ち『金』の髪を風に踊らせる。

その彼の瞳は――

「さて早く行かないと怒られてしまうな」

——蒼い瞳だ。

第一章 TS少女と無色の蒼

第一話 宇宙世紀と少女

「——比べるべくもないさ……」

さあ、可憐なお姫様お手をどうぞ」

「さわるなロリコン」

サングラスをキリリと決めた男。

その男は端正な顔立ちと、惚れ惚れするような金髪を穏やかな風に波立たせていた。

「ふむ、人聞きの悪いことを言う」

どうやらお姫様はご機嫌斜めのようだ」

おそらくこの男は自分の容姿をよく理解している。

ニヤリ——この表現がよく似合う表情で微笑む男は、一般人が嫌うはずのその表情さえ様になっているのだから。

「近寄ったらその金髪をむしりとって

大衆の前に立てないちよんまげにしてやるからな

いいか、それ以上近寄るなよロリコン」

さて、対するはまだ齡12にも、届かないだろう幼さの残る少女だ。名をアズハという。

男を美青年とするなら、この少女は幼いながらも人を惹き付ける美少女といえるだろう。

銀系の艶やかに靡くセミロング。健康的というよりは、陶磁器のように白い肌。そして何よりもその顔立ちが、仏頂面だというのに完成された人形のような。まだ幼いため、美しいというよりは可愛いらしい、というべきだが。

「これは困ったな」

その少女を見つめつつ、そう言いながら微笑む男はさらに絵になっている。それはさながら絵画の中からきたお姫様を口説く王子様のようなのだが、相手が少女なので少々危ない絵面……ではある。

しかしサングラスのむこうには、隠された復讐の炎がたしかに灯っている。

優しいな表情から感じとれる人間などいないだろう。その自信もあれば隠し通す度胸もある、そういう男だ。むろん、この少女は知っているのだが。

——時にU・C・0077

この少女と男が出会うのは偶然か、はたまた神の敷いた必然と呼ぶべきストーリーの一片なのか。

ただ言えるのは、この出会いは双方にとってこの先の人生を大きく変える、分岐点の始まりに過ぎないということである。

○第一章○

T S 少女と無色の蒼

「人が宇宙への開拓を進め、努力の末進出してから早77年。

お前らはどういふことか分かるか？」

77年前の先人は、地球から飛び出て何もかも初めての地で生存権を得たのだ。まるで数百年前、人類が初めて海の向こうを知った日のようにな。

そこにはたくさんの失敗と一つの成功しかない。比率を見れば大失敗だったかもしれない……しかし大きな一歩だったのだ。

なぜなら、その一歩があるからこそ、我々スペースノイドはこうして生きているのだからな。

そしてこれら我々人類が宇宙へと進出した新時代を、宇宙世紀とよぶ……と、授業はここまでだな

予習復習はしっかりするように！あとフラッツは遅刻するなよ〜」

「ぶっ」「はーい」

チャイムの音、子供たちのシンクロした声とともに授業が終わった。

先程の科目は歴史。中でも宇宙世紀に関係する内容で、何から何まで興味をひかれる話だった。

「あまり騒ぐんじゃないぞ」

じゃあなど、一通り準備を終えた先生が教壇を離れると、先程まで静かだった教室は一気に喧騒に包まれる。

我先にと立ち上がる生徒、大声で話し出す生徒、居眠りをしている生徒。それはさまざまだった。

「……はは」

そんな中でも俺は、先程の話を思い浮かべ、冷めやらぬ興奮を抑えるのに時間を有している。それは一重に、俺がこの世界の外を知っているからなのか……

さてちんぷんかんぷんな人のために説明することにする。

まずここは12歳までの少年少女が通うジュニアスクールなのだが、知りたいのはここにいたるまでの経緯だろう。

さて、俺の歴史を辿っていかうか。

まずこつちに来た時の話だ。

あの狂人……神と話をしたあとのことだ。

突然視界が狭まり気づくと女性の腕の中で目覚めていた。

結果的に彼女は俺の母親だった訳だが、初めは何が起きたのかと動揺して大泣きしてしまつたし、じたばたとおおいに暴れた。

今では本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだけど、その時はなんとか母さんに落ち着かせるように背中を叩いてもらい、優しく暖かみのある腕の中で落ち着いてまた眠っていた。

つまるところ、俺は赤ちゃんからの再スタートを切つたのだ。

やつたね、人生リセット強くてニューゲームだね！

……なんて思つたのは一瞬でした。

なぜなら、そこからは羞恥心との長く苦しい戦いが待っていたからである。

「アズハくまんまの時間よ?」

「アズハはいいこでちゅね」

「あら、おもしろしちやたのね」

……………何も言うまいて。

という訳で、そのこの辺りは大きくカットという名の割愛をさせていただく。

それより後の事を話すべきだと思うな、うん。

俺の生まれた家庭はリーベル家といい、コロニー間の中ではそこそこ裕福な家庭だったらしく、家……というより豪邸には複数人のお手伝いさんがいた。

歩けるようになって屋敷内を探索していると、とても好意的に話しかけてくれたものだ。

突然抱きついて拉致して着せ替え人形にするのはどうかと思うけどね。

「アズハさまぁ……次はこのドレスう」

「あら、アズハさま涙目っ……カワイイ」

「はっ！写真……報道用の撮影カメラ持ってこーい!!」

「(……カエリタイ)」

早くここから出してくださいよ……状態の涙目の俺をもてあそんだあいつらは許さんが。ぜつたいだ。

それと、お気づきかと思うが、俺の今生の名前はアズハ。アズハ・リーベルという。

はは、なんだか女の子みたいな名前だなあ……なんて初めて聞いた時は思ったものだ。

母親もよく女の子の服について話していたので、まさかな……とは思っていたけど。その行動は一応だった。一応確認のため、絶対ありえないと思いつつも触った一歳初めのこと。

（拜啓神様

性転換するなんて聞いてませんでした）

絶叫したのは言うまでも無い。

そこからはまさしく苦節というにふさわしいものだった。

なにせ前世は大人と呼ぶべき年代だった男が、今や箱入りお嬢様をやっている。

もちろん『俺』というのは禁止されているため、対人的には『私』という一人称を強制されていたりする。

口調はなるべく子供っぽく話しているけど……これもなかなかむずかしいのだ。

なにせ、十数歳の子供が流暢に、それも男口調で話しては気味が悪いだろう。はずかしくても我慢している。

そしてまあ色々あってこのジュニアスクールに至るわけだ。

え？説明不足だつて？……子供の成長記録を見て何が楽しいんですかね？

ああそういうえば、原作キャラとも会うことが出来たんだつた。

俺の生まれたコロニーはサイド1にある3バンチコロニー、通称エデンである。

このコロニー群はソロモン要塞建設地に近い事もあり、どちらかと言えばジオン寄りの人々とよく出会う。ちなみにここまでで3人と出会つた。

彼らの名前は――

「アズハちゃん！……アズーハちゃん!!」

「……へっ?!」

「へっ?じゃないよ!」

ほら、ハゲのつままない授業も終わったんだから帰ろ!」

数分程固まっているとクラスメイトが話かけてきていた。

なかなか強引な彼女は俺の手を強くひいて席を立たせる。

(イタタタ、待つて、この子何故か俺をつれ回して遊ぶ子じゃん)

この子はいいんだけど、この子のお姉さんたちはうちの使用人へんたいと同じ匂いをする。

(い、行きたくない!)

こ、ここは何か言い訳をつけて離脱だ。びば離脱!!)

「ちよつ、いや、あの、ほほほら、私ちよつとやることが……」

「え、でもアズハちゃん朝すぐ帰るって言ってたよ?」

(え?言ってますんけどそんなこと……………?)

不思議に思つて首をひねると、女の子の後ろ後方、窓の向こうの木に女性がぶら下がっているのに気がついた。

(あれ、なんでここにうちの使用人がいるんですかねえ?)

「どうしたのアズハちゃん

すごいあせだよ?大丈夫?」

心配する少女を横目に使用人を睨む。

しかし返ってきたのはぐつというサムズアップ……何が言いたい。

「あ、そういえば、アズハちゃん家のおつたईさんイイ人だね!

朝話したんだけど、とつても……」

(おまえか!!!)

その女性は満面の笑みを浮かべ木から離れていった。

「まつ!」

「ちよつと、アズハちゃん?

聞いている？ほら」

おねえちゃんたちがきてるよ？

(オワタ)

「じゃあね！アズハちゃん！」

「…………ふあい」

大きく手を降る彼女に小さく手を振り返す。

俺は疲れている。

なにせかれこれ三時間はあのお姉さま方に付き合わされたのだ。

(疲れた…………早く帰って寝よう)

やつれた顔を手で隠し、遠い所を見つめながら送迎車のドアを閉めるのだった。

「おかえりアズハ」

「「おかえりなさいませ」」

「ただいま」

家に帰ると母さんと使用人がいて、いつせいに迎えの声がかかる。

ほとんどの人間が揃っているようだが、残念ながらあの使用人は出掛けているようだ……逃がさんぞ。

「あら、ずいぶん疲れているわね

ふふ、お友達とずいぶん遊んだようね」

（いえお母さま、遊んだのではなく、遊ばれたのです

ふくしゅーまったなしです）

「おや」

ふつつつと怒りと復讐の炎に燃えていると、横から恰幅のいい男が寄ってくる。

この人はバルドー・リーベル、つまり俺の父にあたる人だ。

「おかえりアズハ

さあ、元気な顔をお父さんに見せてごらん」

「うん、ただいまお父さま」

疲れているが、両親には笑顔を見せて挨拶をする。もちろん二人とも笑顔で返してくれるし、そのあと抱き締めてくれる。

いつでも心配かけないよう笑顔でいる、これは産まれてすぐに決めたことだ。

使用人の言葉を聞いたからそう思ったのだけど、どうやら両親にはなかなか子供が出来なかつたらしい。

医師に見せても異常はなく、特に問題も無いというのに。

そう、俺は両親にとつて長く長く悩み、それでも望み続けた子供だったのだ。

なのに産まれたのは過去を持つ歪んだ子供である。両親にはこのことを伝えてはいないが、聞いてしまったらきつと……俺の中にあるのは愛情ではなく、罪悪感のような歪な感情だった。

だからこれは贖罪なのかもしれない。

「ふふ、アズハはいつも元気ね」

「私達の娘だからな」

本当にごめんなさい。

第二話 揺れる世界と幸せな家族

「地球？」

これは学校後、いつものように使用人に遊ばれていた私に父さんが話しかけてきたことから始まる。

この日父さんの帰りは早かった。

コロニー、地球を問わず飛び交い、幅広い交易を主とした企業、リーベル商会。その社長である父さんにしては早い帰りだったのだ。

部屋へと入り、真っ黒の外套を用人に預けながらこちらにむけて話す。その姿はどこか緊張していた。

「ああ、そうだよアズハ

きみはまだ地球に行ったことが無かっただろう？

ほら、小さいころからよく地球の事を聞いてきていたし、興味はあるんだらう？」

ぎこちない笑みとともに紡がれる言葉は、俺の思考を停止させるのには十分だった。そうとも知らず、父さんは続けて話し出す。

「だから……いちど旅行で行ってみないかい？」

地球はコロニーとはまた違っていて、とても綺麗な世界だぞ」

父さんの顔を見ながら俺は硬直した。

嫌だからではない、唐突で驚いたわけでもない。

そればかりか、とても魅力的な話だ。

いや、まあ外から見ただけのこと無くても知ってはいるんですけどね。それでも今生では初めて地球だ。わくわくするのは当たり前だった。

「アズハ？」

「……あつ」

しばらく何も言わずただ父さんを見つめっていると、母さんが父さんの横に立って俺を撫でてくる。

暖かい手のひらの熱が伝わってきた。

「ふふ、あなただったら……アズハは地球に興味津々なんですから

そんなに急かして混乱させたらいけませんよ」

「はは、そうだったな」

反応の無い俺に混乱しているのかと勘違いしたらしく、母さんは緊張している父さんを諷める。

その言葉でようやく俺の状態に気づいた父さんも、後頭部を擦ると苦笑いでそれに答えた。

ここで漸く俺の飛んでいた思考が戻ってきた。

「あああ、いや、うん！

とっつても楽しみだよ！

いつ？いついくの？どれくらい泊まるの？」

おおはしやぎである。

なにせ11年振りの地球。

自然に作り出されたバランスの悪い風、この時代にも解き明かされる事のない広大な海、そして青く表情の多い空。

(なんて……なんて楽しみなんだろう)

「あらあら、アズハ落ち着きなさい

まだ一ヶ月も先の話よ？」

「ふっ、こんな喜びられるとはな……計画して良かったよ」

そんな風にはしゃぎながら質問していると、今度は父さんまで頭に手を置いた。部屋の出入口に立つ使用人たちも微笑ましそうに三人を見つめている。

「ありがとう！お父さまお母さまー」

コロニーから地球へと渡るためには、そこそまとまったお金がかかる。それに加えて、最近ニューズで取り上げられていたサイド3で起きた事件も関係して、旅行先としてはとても難しい選択肢だったはずだ。

それなのに、小さい頃からしきりに地球について話していた、俺の心を汲んでくれたのかもしれない。そう思うと少し申し訳ないが……今はとにかく嬉しい。

二人に目をむけると、喜ぶ俺を見つめ二人ともとても嬉しそうに頬を緩ませている。「さあ、落ち着いたらあちらでの観光の話をしましよう？」

きつと見たこともない景色に感動するわよ」

差し出される母さんの手は優しく、暖かい。そこにあるのはたしかに、何の偽りのない普通の家庭の幸せだった。

喜ぶ一人娘、それを見て嬉しそうに微笑む両親。

この時ばかりは、日頃の苦悩も忘れただ喜ぶ。

一ヶ月も先の話だというのに、少女と母親は地球の話で持ちきりで、この夜この家にしては珍しく、家族そろっての夜更かしとなった。

「ほう」

——地球。

「ムンゾの技術官が地球へ？」

「ああ。どこぞの兵隊気取りがあらうことか我らの膝元までわざわざ足を運ぶようだ」

深夜にも関わらず煌々と明かりの灯る部屋。

広々とした部屋。見ただけで一級品だと分かる質のいいイスを、肥えた身体が軋ませる。

そこには五十を超えた男が数人顔を付き合わせ、時折表情を変えつつも談義をおこなっている姿があつた。

「名は……ふむやつはムンゾ——いや、ジオン公国の銃火気類を扱う技術高官だったな

たしか、裏では反連邦組織と共謀しているとの噂も……」

「そんな輩がこの地球、それも連邦軍本部のある地まで近づいてくる……この理由が分からぬ我々でもあるまい……つまり」

「テロ……ですか？」

「まさしく」

最近発生した、学徒が起こしたあの『テロ』の例もあるからな

たしか、サイド3を離港後、サイド1を経由するんだったはずだ……

……さて、どうする？」

「……当然、」

その男が見るものを不快にさせる笑みを浮かべると、周りにいた男たちま続々と席を立ち部屋を後にする。

そして、

「フツ……」

残された唯一の男が小さく笑い部屋を出ると、もうその部屋に響く音は廊下から響く足音だけだ。

静まり帰った部屋の最奥、連邦組織の旗が怪しく揺れる。

風もなく揺れるそれは、混迷するこの世界の象徴の様を表しているよう。

戦争への一投はすでに投げられた。

その戦争とは、多くの人民を失う事となった後に語られる一年戦争である。

音もなく忍び寄る死の風は、いままさに幸せな家庭にも牙を剥かんとしていた。

第三話 零れおちる熱、そして、覚醒

一時の幸せとは、文字通り長く続かない。

そもそも、あのふざけた存在が、わざわざ送り込ませた世界が優しくなんてあるはずもなかったのだ。

それをあの日、はしやいでいた自分は忘れていたのだ。忘れてはいけないことを……この世界は死の蔓延る宇宙世紀だということを。

「いき……なげ、い」

視界が揺れた。

世界が熱を帯びて父さんと母さんが赤い炎に消えていく。

轟音が地面を軋ませ、亀裂とともに崩壊してさらに揺れる。

その亀裂から暗闇へと飛ばされた私は、勢いのまま遠ざかっていく船を見つめ、ただ軋む身体で真空を流れた。

——これは、俺の罰だ。

『こう』なる前、二人が自分たちよりも優先して回してくれた防護宇宙服。願ってしまった地球への旅行。

一瞬でも受け入れていいのかと錯覚した、この世界。産まれてしまった自分という異物。

二人を失ってなお、生き延びてしまった事も——
——これは俺の、私への罰だ。

『たった今入ったニュースです

サイドーを離港した民間旅行船、リフォーが正体不明の爆発をおこした模様

繰り返します、サイド1を離港した民間……』

悲しげ、焦りといった表情のわりに抑揚の無い声が状況を読み上げていく。

少女の目に映るのは、青く澄んだ惑星の姿と小さく火花を散らしながら、墜ちていく

船――

『きみ！大丈夫かい?!』

たのむ、返事をしてくれ!』

そして近づいてくる救助隊の人々。

何を話せというのだ。何を話せばいいのだ。

自分はきつと助からないほうがいいとでも伝えればいいのか？

寄るな、自分に触るなど？

「あ……」

いや、どちらにせよ、この泣き疲れかすれた喉では発声できない。

そもそも、私に選択肢などないのだ。

なぜか、涙は次々と出れど妙に頭は冴えていた。

青く大きな惑星を前に、全てがどうでもよくなつたのかもしれない。

墮ちる船も近寄る人間も、全て自らの枠から外れたように色を無くしていく。

色とはつまり興味のようなものだ。

たとえば、さつきまで悲しんでいたはずの両親の死が、なぜか遠い過去のよう思えたり、どうでもよいような目の前の男が、朝何を食べたのかと疑問に思えたり……壊れたのかも知れない。自分は。

そんな事を考えていた時のことだ。

『(こんな小さな子が……ということはあの船には……くそ)』

声が聞こえた。

いや、実際に言えば声ではなく、掴み所のない抽象的な意思のようなもの。

聞こえた方にいた男を見ると、こちらに向かってきていた男の一人で、ヘルメットのむこうでその悲痛な顔を隠そうともしない。

歴戦の兵士のように無骨な顔をしているくせに、焦ったようにこちらを凝視している。

(この男は優しいんだな)

どうしてか、それはこの男の心の声なのだと思感した。

それを理解した時、自分の身体全体を包む何かが急速に広がり始めた。

男の背後にいた、数人の人間の息づかい。残滓のように残った、船の残骸から伝わる

人々の思念。

地球という生存権の器。

「ああ、綺麗だ」

目に見えないものは実に美しい。

まるで全身が世界に溶けだしたような心地よさに、涙の乾いた目を細める。

『わ、笑った…？この子は…この少女は壊れてしまったのか？』

……あと、あと少し頑張ろうな』

その表情のまま優しい声を出す男は、私を掴むとゆつくりと救助船の方へと泳ぎだした。

「大丈夫だよおっさん、ただ見えているだけだからさ」

男の必死な顔に、小さな安心を感じるとそう微笑んで目を閉じた。

突然意識のなくなった私に、隊員の男がさらに慌てたのは言うまでもないことだ。

この事件は両国の間で小さく騒がれた後、次第に忘れさられていくだろう。

しかし忘れてはならない。

世界からリーベル家の夫妻が失われた事を、一人の少女が絶望したことを、この日世

界に一人の革新を産み出したことを。

——数日後。

(いたい)(もう助からない……)

(まま、どこ?)(今から帰るよ)

(あの子は?無事なんですか?)

(今は眠っているよ……ほら)(……)

「うるさいなあ……」

「気がついたかい?」

白い天井と染みのない白衣が目映る。

その白衣の持ち主は優しげな表情を浮かべると、安堵したように張り詰めていた息を吐いた。

どうやら病室のようだ。

そして、

「……は地球か？」

はじめは声を出して聞こうとしたものの、未だつぶれた喉が痛むため、やめた。ただ、違和感の無い1Gの感覚と、左側にある窓から見える景色にそう思った。

（空に上が無い……）

「どうしたんだい？」

……外が気になるのかな？

そうか、たしかいままでコロニーに住んでいたんだよね」

なぜか悲しそうな顔をした医師が一人で納得している。

いや意味が不明なんですけど。

そしてもう一度優しげな表情に戻ると、

「……は地球だよ

君の住んでいたコロニーと違って、温度管理も天候管理もなされていない、紛れもない自然の大地だ」

と言った。

やっぱり地球でしたか、と冷めた感想を抱いていると、医師は側面の窓を開きただ微

笑む。

するととたんに優しい風が入り込み、静かに髪の間を通り抜け、壁面に飾られた小さな花瓶の花を小さく揺らす。

「ああ、地球の風だ」

久しぶりの地球は俺を歓迎してくれるようだ。

それはいいものの、数十年ごしの地球はやはり不器用なようで、通り抜けた髪が少しボサついてしまった。

それもなんだか嬉しくて、自然と笑みすら浮かんでしまったのだが。

『おお、笑った……あの隊員がこの子は壊れているかも、なんて言うから恐々としていたが……』

男の『声』を知らない振りしたまま、私は微笑む。

目に映る景色は何よりも広く暖かい。

「まるで父さんと母さんみたいだ」

風の不器用さも、太陽の優しさも、きつと二人の見せたかった地球の暖かさだ。

失った悲しみを忘れた訳ではない。きつと前世があつたからこそ乗り越えられたのだと思う。

でなければ、あの場で命すら絶ってしまつたかもしれない程に絶望したのだ。

「もう少しがんばろう……」

全部自分が産まれたせいだからだと叫ぶ『俺』が、母さんと父さんにたしかに愛されていた、生きろと言っていたと叫ぶ『私』が、少しずつ自分の中に溶けていく。

相反する心はなかなか混ざりあってくれないが、そんなことは後回しだ。

(今はただ地球の歓迎を受け入れていたい)

そんなことを思い、広い空を見つめたあと、また目を閉じた。

第四話 閑話のような閑話

「おはよう、今日の調子はどうだい？」

「おはようございませす

今日もおかげさまで元気ですよ」

本日は快晴なり。

一度は口にしてみたかったその言葉が、まさしくぴつたりと当てはまる本日。

先程入室してきた医師——先生の白衣の下から見える服装が心なしか薄いのは、きつと今日が暖かいからだ。

この時期にめずらしく、麗らかな日の光が真っ白な病室を照らし、まるで春先の野原で寝転がっているような気分になれる程である。

余談だがこの先生、日系の血が混じっているのか、顔立ちというか雰囲気というか、どこか懐かしい気がする。

初めて見た時は動揺もあり気にしていなかったのだが、ある程度話しているとどうも他人のように思えないのだ。

そんなことを考える一方、私の視線が向かうのは先生の頭。

手元の端末を操作する先生を見ながら、小さな声で「そちらは薄そうだ」なんて失礼なことを呟きクスリと笑う。うん、失礼だ。

話が逸れたね。戻そうか。

先程春先の野原くなんて例えをしたが、ここは実際、白一色の無機質とも言える病室。あんな事件の後ということもあり私の私物なんてものはないのだが、たまにやってくる家の使用人が、小さな果実や必需品を差し入れするので、それが数個あったりする。

それでもこの部屋を大きく占領しているのは、ベッドや空の棚など部屋の付属品だ。そのどれもが誰のセンスなのか白一色なので、明るい電灯の光に反射していい加減目が痛かったりするんだけど。

「(そういうえば先生の私服は白で統一されてるなあ……しかたない黙っておこうか)」

あの日から3日ほどたった。

自由に声が出せるようになったのは昨日だが、ようやく痛みもかすれることもなく話せるようになったのは今日の朝だ。

あんな爆発事故を経験したというのにここまで回復が早いのは、本格的な爆発に飲まれることもなく、早々と宇宙空間へと飛ばされたせいなのだろうか。

それに耐えられたのは、もちろん宇宙防護服のおかげなのだけだ。

「（ぜんぶ母さんたちのおかげだよな……）」

そういえばあの時、そこそこ勢いよく飛び出た後、小さな宇宙船の破片を咄嗟に捕まなければ、広い宇宙の中で最期の迷子を経験することになっていたかもしれない。

もちろんそれを幸運だったとは思わないけど、助かったのは母さんたちの願いでもあするため、必死に生へとしがみついたあの時の自分に今は感謝している。

「はあ……」

「どうしたんだい？ なにか悩み事かな？」

自然に吐き出したため息に先生が反応する。

本当のことは言えないよね。

なにせあの時のことを語るとこの先生は気まずそうな顔をするからだ。

「いえ、なんでもありません」

最近になって多くなつた、愛想笑いを顔に張り付け首を横にふる。

すると分かりやくホツとした顔の先生が私の頭を撫でて口を開いた。

「そうかい?……そうだ、そういえば君の家から贈り物が届いていたよ
なかなか大きな荷物だったからびつくりしたよ……はは」

撫でる手を離し、気まずそうに後頭部をかきながら言う先生。

「とうか……」

「またですか」

「ああうん……いや、ぜんぜん迷惑とかじゃ無いんだよ?」

「だって君があの人たちに愛されている証拠なんだからさ」

(どうせまたドレスとか使わない小物とかでしょ)

ほぼ毎週のように送ってくるものは、家に残された使用人たちからだ。

……それと叔父さん。

伝え忘れていたが、現状あの家は父さんのたった一人いた肉親である、弟……つまり私の叔父さんが引き継いでいる。

そしてこの叔父さん……デオという人物がなかなかに変人なもので。

たとえば、父さんと一つしか歳が変わらないというのに、未だ定職に就くことなく世界各地を旅してるとか、信奉者ばりに父さんや母さんを尊敬していたことだとか……私を神聖視していることだとか。

職業に関しては現在リーベル商家を立派にまとめているため、ほとんど解消済みとはいえ、父さんや母さん、そして私に対するよく分からない神聖視は今もなお健在である。基本的に私達が関わっていないなければ普通に限りなく近い変態にギリギリ収まらない程度で済むので……心配しかないけど。

それでもあの家を守ってくれて、なおかつ私を見放すことなく、見守ってくれていることは感謝している。

「いつもすいません……」

「ははは……大丈夫大丈夫」

また衣服関係は地球にある君の別荘にでも送っておくよ」

最近小難しい別荘の番地を覚えただー、なんて笑う先生にさらなる申し訳なさが生まれるのだった。

第五話 始まりへと続く日常

本日は快晴なり——というのはいささかデジャヴを感じるけど、地球の空は今日もごく機嫌である。

市街に降り注ぐ日の光が、街路樹の葉を透き通り時折揺れ、未だ昼時で無いのに溢れかえる人々はどれも忙しなく動き回る。

それを見て、「この世界も同じだな」と笑みを溢した。

（やっぱり自然の光って気持ちいいなあ……なんだろう、暖かいというか安らぐというか……）

とにかく、先生に外出許可をもらってよかった）

そもそもそんなに大きな怪我はしていなかったものの、小なりとも怪我を負い、いいところのお嬢様が事故に巻き込まれたということで、外出許可を取るのも一苦労だったのがある。

主に反対派は『家』の人間なのだが。

(だいたい全員が全員過保護なんだよなあ……なんとか許可は出してもらったけどさ……それも条件付きだし)

ちらりと隣を見ると、見上げるほどの大男がこちらを伺っていた。

ひつ——と、小声を漏らしたのは仕方がないだろう。

(いくらなんでもこんな大男が護衛なんて聞いてないぞ……それに……)

視界にチラチラと映りこむ自身の髪の毛先が、風に煽られ太陽の日差しで宝石のように輝く。

……とまあ、自身の事ながら銀系の糸とはたいへん目立つもののように、先ほどからすれ違う人の足を止めてしまっている。

許可を貰えたことで浮かれてたけど、このあたりも考慮すべきだったなあ……と、今さらに後悔している所だ。

「はあ」

(ため息をついていても仕方がないか……)

「そういえば、野菜に魚、屋台にはお肉……結構揃ってるんだね」

「港に近いってこともありますね……この辺りは特に流通に長けているので

必要とあらば、我々がご用意いたしますが」

隣を歩く男の返答を聞き、そんなものかと適当に相づちを返す。後半の問いはあえて返さないのが最近主流の対処法だ。

それに、そんなことよりも遠くに見えるカジノに興味が……

「あの、お嬢様」

顔を反らすように町並みに目を向けていると、男が神妙、心配ですというような顔を作り声を上げた。

「ん、なに？」

「当……いえ、本当に……そのご無事なのですか？」

言い淀むその姿は何人もの姿と重なり、また、何人もの言葉をリピートさせるものだ。これまでも何回とされたこの質問は、おそらく両親の死を指しているのだろう。

直接言葉にしないのもそのせいだろう。

（あー、またこの質問か。

全然大丈夫と答えるのもなんだかなあ……かといって辛いなどと言おうものなら心配の嵐だし）

ちなみにこれは、現在一番の悩みの種である『お嬢様は平気な顔をしておられるが、実は裏で泣いていたりしないだろうかああ心配だ』病である。

文字通り心配で心配でしょうがない使用人達が、病室へとせつせと足を運び、毎日毎

日顔を出しては問いかけてくるといったもので、私にとっては気の疲れる悩みの一つだった。

（みんなホントに心配してくれているのは分かるんだけどね？『色』で嘘では無いことも読み取れるしき）

例えるならば『ほのかな緑』。

包み込むようなあたたかな、人を思う気持ちに着色したような優しい色。

それは私を心配する彼ら彼女らから発せられる光だ。

これがかの『ニュータイプ能力』なのかは分からない。

だけど、感じることはたしかだと思う。人によって大きさは違えど、誰しもから感じる色のようななにか。

別に視認しているわけじゃない。ただ、なんとなく感じるもの。

（まあ、少しずつ分かっていけばいいよね）

あの伝説のエース、アムロ・レイですら最初から理解していたわけじゃない。

抽象的な子供の絵を見せられた方がよっぽど伝わりやすいだろう。

あの有名なセリフ、『人はそんなに便利にはなれない』だっけ？

それがいまなら分かる。この力というにはいささか小さく、穏やかな感覚だからだ。

「……それならばいいのですが」

——シユン

そんな擬音の聞こえそうな顔で大きな男がうつむく。

(いや、ホントに心配いらないからね?)

落ち込む大男と、困ったように微笑む少女。

端から見ればさぞやおかしな光景だとおもう。

そんなふうに周囲の目を集めながら、二人の散歩は続く。

「先輩、少し外出してきます」

「おおう? 珍しいじゃないか、兄ちゃんが街に行くなんて」

「そうですね……何故か惹かれ……いえ、たまには気晴らしを、と思ひまして」

少女が小さな歩みを進める中、ここにも『感覚』を持つものが一人。

彼女のそれよりは不明瞭かもしれないが、同族を感じとる能力は彼の方が上手であるようだ。

感覚の片隅で、最近になって『触れて』くるそれ。

人当たりよく微笑む彼に、中年の社員が手を振った。

その了承の意を読み取り、作業衣を小さなロッカーへと放り込む。

ポケットから時折聞こえるキーの金属音。

それはまるで物語の序章の終わりを思わせ、どこか冒険の始まりを感じさせる。

風におどる黄金の毛先にバイザーを直し、社用車のエンジンをかけた。

小躍りするかのようには車道へ飛び出たその行く先は、前方に見える街ただ一つ。

「ふむ、どうだろうね

……このざわつきは」

出会は近い。